

5.4 知的財産権に関わる事例

(1) 判例やQ&Aを参考にする

法律の条文を眺めていても、具体的な案件が、知的財産権の侵害にあたるのかどうかについて分からないことがよくあります。さらに、新しい概念が法律上の規定のどれに相当するかが不明確なケースもあります。だからこそ、法律上の解釈について裁判が行われることになるわけです。

したがって、弁護士や弁理士を目指していない人が、具体的な案件を抱えている場合、知的財産権に関する判例、Q&A を掲載している書籍やインターネット上の Web ページ等を参照することをお勧めします。すなわち、判例集や Q&A 集等で類似する事例を探し、自分の案件と照らし合わせ、同じ部分や異なる部分を検討する方が良いでしょう。本書でも、読者の理解を容易にするため、限定された範囲ですが、知的財産権に関する事例を示します。

(2) 事例集

1. 図形ハッチングの手法を理解するために、逆アセンブラを使って BIOS の三角形ハッチング処理部分を解読した。同アルゴリズムを参考にして、C 言語で多角形ハッチング処理を作成し、業務用アプリケーションに組み込んだ。

一般にアルゴリズムには著作権が及ばないことになっています。しかも、多角形ハッチングに拡張した上、C 言語で書き直しています。著作権法上の侵害行為に当たらないとするのが妥当でしょう。

2. 友人の会社で作成された非決定アルゴリズムのサブルーチンのソースプログラムを友人に頼んで入手してもらった。解析してみると、自社のサブルーチンより良い結果が得られることが分かったので、友人の会社には無断で、回路素子配置順序決定プログラムに組み込んで業務に使用している。